

## アラゴン連合王国：インカの自称「タワンティンスユ」の源泉

大平秀一（東海大学）

キーワード： アンデス、先住民史、「インカ帝国」、クアトロ・バラス、クロニカ（年代記）

## Corona de Aragón: el origen del nombre “Tahuantinsuyu”

Shuichi ODAIRA (Tokai University)

Keywords: Andes, Historia de nativos, “Inca Empire”, Cuatro barras (varas), Crónica

スペイン侵入以前のアンデス先住民は、文字をもたなかった。1532年、ピサロ率いる自称「征服者」らのペルー上陸以後、彼らはスペインの支配下におかれた。その過程で、先住民社会・文化・歴史は、他者・スペイン人により書き残された。

ピサロらが出会った先住民の王・社会は、「インカ（インガ）」と表象された。強大な王権で統率されたように描かれるその社会は、後に「インカ帝国」と書き表わされ、その名は現代に継承されている。さらに16世紀後半には、「タワンティンスユ（スユ）」という別称も示され、それがインカ国家の自称・史実と捉えられて理論化も図られてきた [cf. Urton et al. ed. 2017]。本発表では、この自称の源泉が Corona de Aragón（アラゴン連合王国）の別称にあることを指摘した。

「タワンティンスユ」（Tahuantinsuyu）は、ケチュア語で「4つのスユ（細長い区画）」を意味し、インカを構成する4つの地方の意と解釈されてきた。この「スユ/スユ（suyu/suyu）」という語は、1534年の Sancho de la Hoz の記録にすでにみてとれ、「……キト方面の土地をカンカスエティオ(Cancasuetio)、コリャオというその先の地方をコリャスヨ(Collasuyo)、海岸部をコンディスヨ(Condisuyo)、奥の方をコンダスヨ(Condasuyo)と呼んでいた。このように、領地を区切る十字架のような形になったこれら4つの地方に名前を付けていた」とある。征服直後で詳細が不明瞭だったにもかかわらず、4つの部分からなるというインカ国家の姿が当初から述べられている。示し合わせたかのように、1530年代の大半の記録ではこの「スユ」に言及しているものの、ペルー上陸から39年間、「タワンティンスユ」という名称は、いかなるクロニカでも言及されていない。

その名称が最初に示されたのは、Juan Polo de Ondegaldo の記録 (*Informaciones acerca de la religión y gobierno de los incas* [1571]) である。そこには、「……これらのインディオの暮らし方では、すべての王国が4つに分けられ、そのそれぞれに uno (1つ) と呼ばれる1万人のインディオがいて、これらのそれぞれにはカシケ、首長、専横者の上に1人の統治者がおり、さらに別の捉え方ではこれらをタワンティンスユと呼んだことが明らかである。これは4つの部分を意味し、そのようにすべての王国が分けられていた。それらはコルカ・スヨ(*colca suyo*)、シンチャ・スヨ(*zincha suyo*)、アンデ・スヨ(*ande suyo*)、インデ・スヨ(*inde suyo*)である。この分割はクスコから始まっており、ワカ（信仰と関わる場所・もの）の地図にあるように、そこからそれぞれこれらの部分に向かう4本の道が発している……」とある。

Juan de Betanzos (1551) や Cieza de León (1553) は、4つの地方としてチンチャスヨ、コンデスヨ、コリャスヨ、アンデスヨを挙げ、後の記録や辞書にも影響を与えている。どういうわけか Polo は、これに改変を図ったものの継承されず、研究者の解釈も Betanzos らの記述を基になされている。

“suyu”（スユ）は、1560年の Santo Tomás のケチュア語ースペイン語辞書にすでに収録されている。そこでは、「紋章のような一部分」(*Parte assi diuisa*) と説明され、「部分に分けること」や人々の（あるいは軍事）パレード等の関連語が示されている。Diego de Torres Rubio の辞書 (1584) では、“suyu”を「縞（ストライプ）」とし、“suyuni”には「土地、畑等に分けること」とある。これ以外に「一部分」として *Hanan suyu*（上スユ）と *Hurin suyu*（下スユ）を示し、*Tawantinsuyu* に加

えて、*Chinchaysuyu*、*Collasuyu*、*Cuntisuyu* という3つの地方名も挙げている。González Holguínの辞書(1608)では、さらに多くの関連語が示され、織物の帯状紋様も含まれている。民族誌を考慮に入れると、“suyu”には畑の区画や織物の帯状紋様等「細長い区画・様態」という観念が共通している。1570年の裁判記録では、コチャバンバにおけるインカの畑地の細長い区分け・単位にこの語が使用されている。しかし、文化の継承性の強いアンデスにおいて、村・共同体の構成単位に“suyu”を用いる事例はなく、この語を冠したインカ国家の自称は極めて異質・不自然でもある。

こうした中、16世紀のイベリア半島において、「タワンティンスユ」と同じ意味をもつ社会名称が存在したことは着目されてよい。それは、よく知られたアラゴン連合王国の別称である。

アラゴン連合王国は、アラゴン王ラミロ2世の一人娘パルネリャとバルセロナ伯ラモン・バランゲー4世の婚約(1137)を機に成立する。その紋章は、(1)ソブラルベの十字架、(2)イニゴ・アリスタの十字架、(3)アルコラスの十字架<4人のモーロ人王の首級>(以上、パンプローナ王国、アラゴン王国等の伝承と関連する図像)、そして(4)黄金色地上の4本の赤いストライプ(バルセロナ伯[領]・カタルーニャ君主国の紋章)からなり、(1)を伴わない場合もある。

それぞれの紋章・図像の要素は、硬貨、封蝋(印章)、建築や棺の装飾、彩画・版画等を通して11~13世紀以後に確認できる。これらの中で、アラゴン連合王国のシンボルと化していったのが(4)である。カルロス1世の葬列の図(1559)では、*Aragón*の名の下で先導者がこの旗を掲げ、馬もその装飾に覆われている。その紋章の要素は、カトリック両王やエスパーニャの紋章のほか、同連合王国を構成するバレンシア王国やマヨルカ王国等の紋章にも組み込まれ、現代の「サニェーラ」(*Senyera* / *Señera*)に継承されている。

この4本の赤いストライプの由来は、1551年のPere Antoni Beuterの著作の中で、ノルマン人との抗争に際し、フランスのルイ王(敬虔王)がバルセロナのギフレ多毛伯(Iofre Velloso [Guifré el Pilós / Wifredo el Velloso])の傷の血に手を浸し、

無地の黄金色の盾に4本の指で上から下にこすり付けたと記されている。ただしこれは後の創出と解釈されており、実際の由来は不明瞭である。上記の逸話の記述頁にはその紋章も図示され、「カタルーニャの紋章 黄金色の空間に血の*Cuatro Barras*がIofre Velloso伯爵に与えられた」という注書きがある[Beuter 1551:cap.13]。

この紋章は*Cuatro Barras*と称され、その名はアラゴン連合王国を指しても用いられていた。アラゴン史では、基礎的用語の一つでもある。*cuatro*はスペイン語で「4」そして*barra*(=*vara*)は槍・杖・棒など細長いものを意味する。これをケチュア語で捉えると、まさに「タワンティンスユ」と訳し得る。Santo Tomásの辞書の「紋章のような一部分」という説明は、おそらく*Cuatro Barras*がイメージされていたのだろう。

「タワンティンスユ」という名称を最初に創出・提示したPolo de Ondegaldo(c.1520-1575)は、スペイン北部のバリャドリ市出身で、マヨール広場周辺に住まい、同市のColegio de Santa Cruzで法学を学んでいる。1543年11月にスペインを発ち、翌1544年3月にペルーのトゥンベスに到っている。バリャドリは*Cuatro Barras*の中心領域の西方に位置し、彼がアラゴン連合王国の情報に通じていたことは疑問の余地がない。クスコのコレヒドール(行政長官)も務めたPoloは、ケチュア語の知識もそれなりにあり、また前述した1570年の裁判の当事者でもあった。

無文字社会のクロニカ(年代記)の史料批判は、困難を極める。一方でインカに関する知識の9割以上は、クロニカに依拠するともいわれる。アンデス先住民史・インカの理解を深めるためには、多様な手法による史料批判が求められよう。

#### 【主要参考文献】

- Beuter, Pere Antoni, 1551, *Segunda parte de la Coronica general de España, y especialmente de Aragon, Cathaluña y Valencia*. Ioan de Mey Flandro, Valencia.
- Urton, Gary, and Von Hagen, Adriana eds., 2015, *Encyclopedia of the Incas*. Rowman & Littlefield, Lanham. (アートン・ゲイリー他編、2024、『インカ百科事典』[大平秀一監訳]、柘風舎。)